

令和 4 年 6 月 5 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02876

研究課題名(和文) 複言語使用による内容と日本語の統合型学習に関する研究

研究課題名(英文) Integrated Japanese content learning using multiple language

研究代表者

野々口 ちとせ (NONOGUCHI, Chitose)

甲南大学・文学部・准教授

研究者番号：30361819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は以下4点を明らかにした。

- 1) 社会科学系「英語学位プログラム(EMP)」学部生は、上級以上の日本語能力習得を目指す傾向があること。
- 2) 日本の大学院博士後期課程で学ぶ中国朝鮮族留学生の持つ複数の言語は、彼らの生活において相補的に機能していること。
- 3) 日本の人文・社会科学系EMP大学院生は、EMPへの満足度は高いが、日本人との交流に対する満足度が低いこと。
- 4) 社会科学系の内容と日本語の統合的学習を目指したクラスで、言語間の非対称な力関係に関するイデオロギーが示され、学習者はトランスランゲージングを通してそれに抵抗していたこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本で学ぶ外国人留学生(日本人帰国生を含む)の複言語使用に対する当事者評価は、日本の留学生教育、特に英語学位プログラムの改善に有益な示唆を与えている。さらに、複言語使用に対する当事者評価に、比喻生成課題やPAC分析が有効であることを示したことは、方法論上の意義がある。

また、本研究は、内容と日本語の統合的学習を目指すクラスにおける複言語使用の実態の一端を記述した。この結果は、今後、内容と言語の統合的学習を進める上で、教師のとるべき言動や態度を考える一助となる。

研究成果の概要(英文)：This study revealed the following: 1) According to the questionnaire survey, undergraduate students in the Social Sciences English Medium Program (EMP) tend to aim to acquire advanced Japanese proficiency. 2) According to the interview survey, Korean Chinese students studying in the doctoral program at a Japanese graduate school use multiple languages complementarily in their lives. 3) According to Personal Attitude Construct (PAC) analysis, EMP graduate students in the humanities and social sciences are highly satisfied with EMP but less satisfied with interacting with Japanese people. 4) The classroom discourse analysis shows that asymmetric power relations between languages exist in the class, albeit aimed at integrated learning of Japanese and the social sciences, and that learners resisted such relations by translanguaging.

研究分野：日本語教育

キーワード：複言語使用 当事者評価 相補性の原理 言語意識 トランスランゲージング 比喻生成課題 SCAT P
AC分析

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

大学のグローバル化により、近年、留学生の受け入れ増加に加え、英語のみで学位取得を目指すいわゆる英語学位プログラム(以下、EMP)が続々と開設されている。EMPの留学生には、日本語学習歴があるものの、日本語だけで専門科目が学修できるレベルには達していない者も多い。しかし、EMPの留学生の中にも、日本語による専門科目の学修を希望する声があり、またその学修意義も小さくない。特に人文・社会科学の科目では、専門の内容が日本の言語文化と密接に関連していることが多い。他方、日本人学生とともに日本語で学位取得を目指す留学生の日本語能力にも幅があり、日本語のみでの学修に困難を感じている留学生も一定数存在する。

大学・大学院での学修・研究には、理解・分析・評価といった高次の思考が欠かせない。日本の高等教育機関で学ぶ留学生には、各々の日本語能力を活かしつつ深い思考を伴う学習へのニーズが相当程度あると推測される。

そこで、本研究では、留学生の日本語学習動機や複言語使用の現状を明らかにした上で、複言語使用を梯子に思考を媒介する言語の機能を重視した言語学習を追求する。留学生は、すでに母語や英語などの第二言語を媒介とした思考力を有している。ある人が複数の言語を使用する場合、バイリンガル教育では、その話者のもつ複数の言語を一体のものとしてとらえる。つまり、思考を媒介する言語はその人の持つ言語の総体で捉えるべきであり、言語の媒介機能を重視する日本語教育は、各人の持つ母語や他の第二言語とともに「思考を媒介する言語」としての日本語を育成する教育と位置づけられる。

2. 研究の目的

本研究は、日本国内の高等教育機関で、複言語使用によって学習者の既存能力を活用しながら、内容についての理解・分析・評価といった高次の思考力と日本語能力を同時に伸張する学習の必要性和有効性を明らかにし、統合的学習モデルを創出する3年間の研究である。具体的には、第一に、留学生の日本語学習動機を明らかにするとともに、留学生の日本語が彼らの持つ複数の言語とともにどの程度機能しているかを、当人の視点から記述する。第二に、複言語使用を梯子に深い思考を伴う内容と日本語の統合的学習プログラムを設計し、学習の実態を明らかにする。本研究では、日本語専一でない複言語使用ならではの学習目標や評価観点が設定されることが予想され、多様な価値が追求される。

3. 研究の方法

本研究は、2種類の研究で構成される。

第一は、留学生の日本語学習動機と、留学生の持つ複数の言語(母語や日本語など)の現状に対する当事者評価の研究である。留学生の日本語学習動機調査と留学生の持つ複数の言語に対する自己評価をもとに、多元的思考を伴う内容と日本語の統合的学習へのニーズを特定し、そのニーズがどのような環境下で発現し、言語の使用実態とともに、当人によってどのように把握されているかを明らかにする。

第二は、複言語使用による内容と日本語の統合的学習プログラムの設計・実施・分析に関する研究である。専門科目の内容と第二言語としての日本語の統合的学習プログラムをデザインして実施する。そして、教室談話の分析を通して複言語使用による学習活動を評価し、プログラム改善への示唆を得る。

4. 研究成果

本研究では、第一の研究結果として1)2)3)を、第二の研究結果として4)を得た。

- 1) 社会科学系 EMP の学部生を対象に、日本語学習動機に関する質問紙調査を実施した。結果、今回のデータからは、社会科学系 EMP の学部生が上級レベル以上の日本語能力の習得を目指す様相が確認され、特に「交流志向」、「日本文化・社会理解志向」、「キャリア志向」において高い学習動機を持っていることが示された。他方、卒業単位取得及び他者の勤め等、自身の学習意欲から離れた「義務的・誘発的動機づけ」は相対的に低い傾向にあることが明らかとなった。キャリアに関わる学習動機と他項目との相関分析では、「日本で就職したいから」という日本語学習動機は統合的動機づけとの相関が強いのに対し、「自国で日本語を使って就職したいから」という学習動機は他の道具的動機づけとの相関が顕著であった。また、「読み書き」能力の向上に関わる動機づけは相対的に高く、さらにアカデミックな読み書きに対する動機づけと、日常生活で必要とされる読み書きへの動機づけに分かれる傾向が見られた。
- 2) 日本の大学院博士後期課程で学ぶ中国朝鮮族留学生にインタビュー調査を実施し、その文字化資料を、SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて質的に分析して理論化した。結果、中国朝鮮族留学の持つ複数の言語が、留学生活において相補的に機能している

ことを明らかにした。ある中国朝鮮族留学生の場合、中国語を使う自分はお母さんと例えられ、その理由は[ホスト社会における中国語の万能性]に、韓国語を使う自分はおばあさんと例えられ、その理由は[韓国語での感情表現と家族伝統性]に、日本語を使う自分はお父さんと例えられ、その理由は[日本語での実力証明]に、三カ国語を使う自分はおじいさんと例えられ、その理由は[高い権威]や[自尊心]にあった。また、この留学生の語りから、[公的言語としての中国語]と[私的言語としての韓国語]と[経済的な利益につながる日本語]を相補的に使用している様相が浮かび上がった。

- 3) PAC(個人別態度構造)分析を用いて、社会科学系大学院修士課程 EMP の留学生と人文科学系大学院修士課程 EMP の帰国学生各 1 名を対象に、言語生活に対する当事者評価を調査した。結果、両者とも英語での研究生活には満足しているが、日本人学生との交流やアルバイト、就活などでの言語生活に、程度の差こそあれ、不満や抑圧的な態度構造を持っていることが示された。日本社会に閉鎖性・階層性・学歴重視などの風土を感じ取り、2 名とも高い複言語能力を持ちながら自分の能力を十全に発揮しているとは言えない現状が描き出された。また、両者とも家族が比較的高い重要度を占めており、母語機能の重要性が確認された。
- 4) 社会科学系大学院修士課程 EMP で、複言語使用による専門科目と日本語の統合的学習のクラスを設計して実施した。そして、このクラスの教室談話をミクロに分析し、教師や一部の学習者が、英語や目標言語である日本語を学習者の母語である中国語より上位に位置付けるイデオロギーを創り上げていたことを明らかにした。これに対し、日本語力の低さゆえに普段は黙っているしか選択肢のなかった学習者が、(中国語で読んだと思われる)本の内容やタイトルの由来を中国語で提供することによって、はじめて注目され、日本語・英語 > 中国語という言語間及び言語使用者間の関係性を逆転させた。これらの場面では同時に、日本語と英語の混淆的使用によって日本語力では下位の学習者が、日本語力が上位の学習者に足場かけをする様子や、協働による多声的な言語使用、中国語と日本語の自由な往来による知識の共有が見られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 藤原 智栄美・大平 幸・野々口 ちとせ	4. 巻 26
2. 論文標題 英語基準学生の日本語学習動機に関する一考察：CRPS (Community and Regional Policy Studies) 専攻学生に対する質問紙調査より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館大学 政策科学	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00005262	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野々口ちとせ	4. 巻 21
2. 論文標題 外国につながる子どもたちの中学校国語科教育－教科指導と日本語指導の統合を図る3つのアプローチの概観－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 城西国際大学大学院紀要	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 房 賢嬉・野々口 ちとせ	4. 巻 187
2. 論文標題 バイリンガリズムの全体論的視点から見た中・朝・日三言語話者の言語使用と意識 比喩生成課題を用いたインタビュー調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北学院大学教養学部論集	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野々口 ちとせ	4. 巻 19
2. 論文標題 人文・社会科学系英語学位プログラムの大学院生は自身の言語生活をどう評価するか PAC (個人別態度構造) 分析による当事者評価	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 95-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14960/gbkkg.19.95	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野々口 ちとせ	4. 巻 14
2. 論文標題 多声的な言葉の学習 トランスランゲージングと協働で声をあげる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 多元文化交流	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 野々口ちとせ・房賢嬉
2. 発表標題 比喻生成課題による複言語使用者の言語総体に対する当事者評価
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原 智栄美・大平 幸・野々口 ちとせ
2. 発表標題 英語による学位プログラムで学ぶ留学生の日本語学習動機に関する一考察
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第5回年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	房 賢嬉 (Bang Hyeonhee) (60625002)	東北学院大学・教養学部・准教授 (31302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------